



謹賀新年

臼杵石仏のところにある満月寺の“あうん”像のひとつで、同じく鎌倉時代のものといわれている。鼻がなくなっているのは病気回復に対する信仰によって削られたということである。(本文15頁)

もくじ

〈NETWORK・ネットワーク〉

2. 福岡県の住宅需要は将来どうなるのか —— 人口構造からみた住宅需要構造の検討 ——
5. 地域づくりにおけるソフト化・サービス化 —— “出石皿そば” で産業転換をした兵庫県出石町 ——
10. 建築から始まった小国のまちづくり —— 地方シンクタンク協議会 第5回九州・沖縄ブロック交流会

〈見・聞・食〉

11. 土石流禍からの復活の息吹・雲仙深江町
12. 特集 朝市・市場を歩く 柳橋—沖繩—津屋崎

〈近況〉

15. 私の近況／ミニミニデイサービスを見学・阪神大震災とインターネット・臼杵石仏めぐり・関鯖を食べた！
“韓日古典音楽のふれあい” という音楽と踊りの夕べにいった・地方からの発信「吉野ヶ里ブックス」・贈りものは道楽である

〈本・BOOKS〉

17. 「西南日本の経済地域」 経済地理学会西南支部 編
18. 「日本人の誇り」 —— 「金を惜しむな名を惜しめ」の思想 —— 雁屋 哲 著
19. 「アーロン収容所」 会田雄次 著

福岡県の住宅需要は将来どうなるのか

—人口構造からみた住宅需要構造の検討—

「モノは買う人が多いほどよく売れる」という単純な発想で福岡県及び福岡都市圏の住宅需要の構造を考えてみたい。

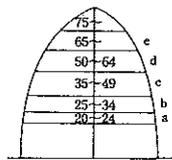
住宅の需要は①マクロ的、長期的には買う人が多い程売れる。②買う人の年齢やライフスタイルに応じて所有形態が変わる。③売る側が「安くて品質のよいもの」を供給すれば、よく売れる。④金利やローン設定などのゆとりがあるとよく売れる。主としてこの4点をベースにして住宅需要の構造を整理している先生（三宅醇先生：豊橋技術科学大学）の考えを参考にして、今回は買う人、あるいは借りる人の数が増えるか、減るのかのみによって、福岡県及び福岡都市圏の住宅需要を検討してみた。

下の表に示したように、若いうちは単身用借家でスタートし、結婚して広めの借家にうつり、その後持家にうつるとというのが、我々の人生と住宅とのかわりあいの歴史であった。

〈今後の我が国の住宅需要は借家、持家とも厳しい時代が到来する。〉

三宅先生が示された我が国の人口構造と住宅需要の概略については、次のようなことが指摘されている。

年齢別住宅需要モデル



- a : 24歳以下 単身用借家需要層
- b : 25～34歳 世帯用借家需要層
- c : 35～49歳 前期（第1次）持家需要層
- d : 50～64歳 後期（第2次）持家需要層
- e : 65歳以上 高齢者住宅需要層

年齢層による住宅需要の変化

- ① 5歳刻みの年齢層で上位の年齢層より5歳下の年齢層が多いか少ないかである特定の年齢層特有の住宅需要の増減を示すことになる。住宅需要は経済の動向にも左右されるのは当然であって、この年齢別需要は経済によって前倒しや後倒しなどによって多少のタイムラグは生じることを念頭におけば矛盾しない。
- ② 日本の人口の年齢構成は一樣ではなく、大きな偏りをもっている。そのひとつは昭和ヒトケタ層で、このグループは大正生まれの人たち（特に男性）が戦争で多くなくなったので、あたかも急増したかようになっており、住宅需要にインパクトを与えた。
- ③ ベビーブーム世代（昭和20年前半生まれの世代）は戦後経済のあらゆる過程で消費需要の大きなインパクトを与え続けてきたが、それは住宅需要についても同様である。
- ④ 次の世代は大幅に出生数が減り、マイナスの需要効果を与えた。（10年間）
- ⑤ 次の世代から第2ベビーブーム世代までは15年間出生増（対前世代）が続いた、ここまでの世代が概ね現在までの住宅需要を形成してきている。

※要約及び全国の人口構造と住宅需要の対応図は「再開発コーディネーター」57号、58号より抜粋

〈福岡県全体でみても、5年後以降の世帯用借家及び第1次持家需要は厳しい〉

全国の人口構造と住宅需要構造との関係を参考に福岡県における年齢別人口構造から将来の住宅需要はどうなるのかをみてみる。

- ① 全国の人口構造をみると、25～29歳代の若い層は増加に向かっているが、福岡県の場合、世帯用借家需要層（25～34歳代）となる世代はいずれも減少している。このことからみると、世帯用借家需要層は厳しくなると思われる。

また、現在は地場のマンション業者が郊外にローコストマンションを供給しており、25～34歳代の人は、このローコストマンションを取得しているため、世帯用借家需要はさらに厳しいと考えざるを得ない。

② 単身借家層（24歳以下）をみると、1995年では第2次ベビーブーム世代（20～24歳になる）が中心的存在であるが、2000年以降には単身借家需要の主力を占める20歳未満が減少に向かうので、その需要は厳しい状況になるとみられる。本県の場合、この年代は流入による増加によって需要増が期待できるが、第2次ベビーブーム世代程の需要量までは到達できないものと考えられる。このため、質の悪い単身用借家住宅は空家になることが予測される。

③ 前期（第1次）持家需要層（35～49歳）をみると、1990年時点ではベビーブーム世代（40～44歳代）が第1次取得時期にあることから、1995年までは需要増として見込まれる。しかしベビーブーム世代以降の15年間の出生数はマイナスとなることから、世帯用借家需要同様に厳しい時代が到来すると考えられる。

第2次ベビーブーム世代（15～19歳代）が前期持家世代に移行する約15年後（2005年）において、持家需要が再度復活する可能性がある。これは人口構造といった一定の前提条件の下で推察しているのであって、例えばこの時期に持家取得に拘らない世代の台頭、あるいは子供の数が少ないことから親の家を引き継ぐなどした場合には、そのまま新たな持家需要に結びつくかどうかかわらない面も持っている。

④ 後期（第2次）持家需要層（50～64歳）をみる

と、ベビーブーム世代が、2000年にこの層に到達する時期には需要増が期待できるものと考えられる。しかし現在、住宅の資産価値が低迷していることから、この低迷期が続く限りは現在居住している持家を処分してまでレベルをアップしようとする層の需要はあまり期待できないのではないかと思われる。

〈福岡都市圏では単身借家層の需要はある程度維持する。〉

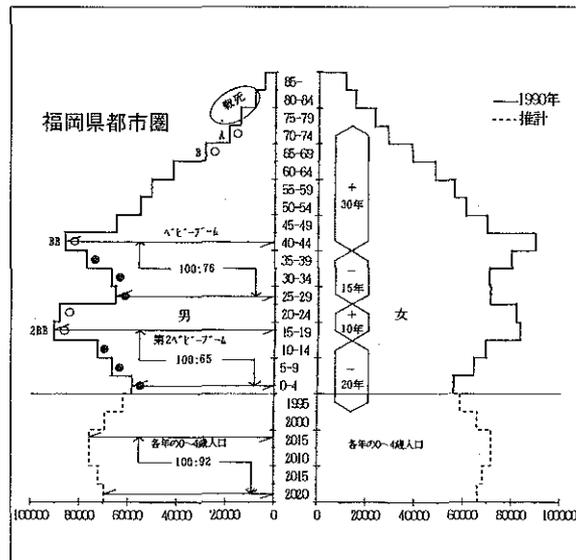
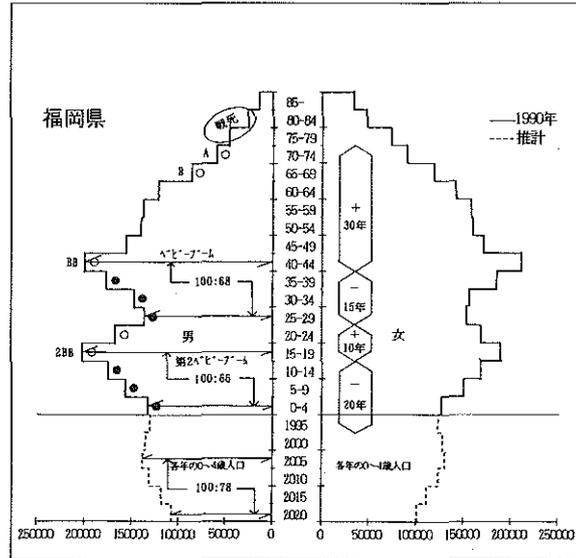
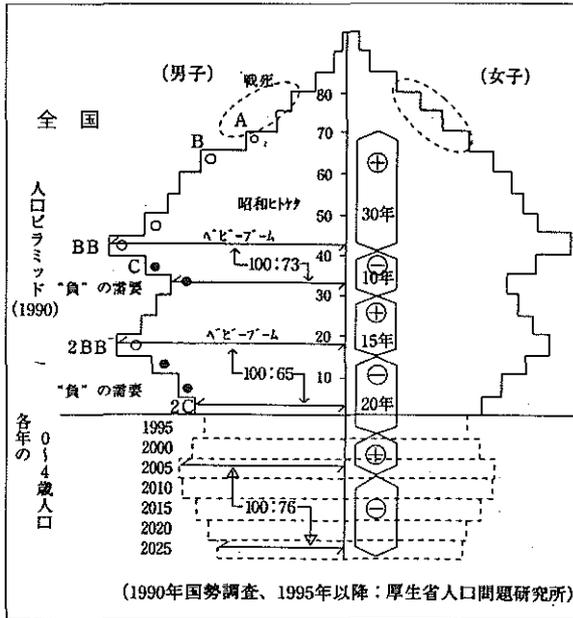
同様に福岡都市圏での人口構造と住宅需要の構造とを福岡県と比較しながらその特徴を述べたいと思う。

① 単身借家需要（24歳以下）をみると第2次ベビーブーム世代（15～19歳代）とその上の世代（20～24歳代）がベビーブーム世代を上回っており、福岡都市圏での単身借家層の需要は旺盛である。これは大学生や高校卒業後の就職などによって、この年代の層が都市圏に多く集まってくることに起因している。将来とも福岡都市圏の若者を引き寄せる構造が変わらない限り、単身借家需要は継続していくものと考えられる。

② 世帯用借家層（25～34歳代）は県全体と同様に10年間は出生数はマイナスとなっており、この層の需要は厳しいものと予測される。

さらに、福岡都市圏ではこの層のローコストマンションへの移行が顕著に現れることから、世帯用借家層の需要は第2次ベビーブーム世代到来まではかなり厳しいと考えられる。

③ 前期（第1次）持家需要層（35～49歳）の需要は、全国と同様に、1995年まではベビーブーム世代が占めていることから需要増が見込まれる。その後15年間の出生数はマイナスとなり、持家需要は厳しくなると考えられる。



⑤ 2015年～2020年以降（第2次ベビーブーム世代が持家を取得する時代）以降は、持家需要、借家需要とも大きくマイナスとなる。具体的には既存ストックの空き家化をはじめ、都市圏郊外部での戸建て持家においてストックの余りが生じることになる。このため、中古市場の流通を活性化させることやリフォームに力を入れるなど、中古住宅を有効に活用しない限り、郊外部に空き家あるいは廃墟になった住宅群が残った風景が想像される。逆の面で見ると需要量がマイナスとなるのであるから、現在都市圏内で供給されている40坪程度の狭い宅地は、後生の世代へ引き継げないことになるのではないかと懸念される。

⑥ また一方で中古戸建て住宅が活況になると、福岡市内の35歳以降の前期持家層が大きく郊外部の

※上の2図の年齢別人口構造は「コーホート推計法」に基づき独自に推計したものであり、総人口は各自自治体で推計したものと異なる。

もそれは続いたのだが、戦後の高度成長期以降になると、農業の収入では主業の立場におくことができないうらい、農村の経済生活も激変し、その結果人口を減らして調整するか、主業に近いものの導入を行うかということになってきた。出石町の場合は但馬ちりめんと柳製品・ビニールカバンの下請けなどがその位置を占めた。それに磁器としての焼きもの加わっていた。

1970 (S45) 年以降の出石町の就業状況 (常住者しかわからないので、それで推移をたどる。(図2、3) 以前の昼夜間人口は大巾流出超過であったが、1990年はほとんどトントンである) の推移を見ると、農業が36.7%から12.2%に減り、それに対して商業・飲食・サービス業が24.6% (図の2項目を加えて) から36.5%に増加している。

おそらく、この間に在来の地場産業が停滞している中で昭和47~49 (1972~74) 年のオイルショック、昭和60年代の建設不況などを経て、人々がリーズナブル (納得できて、高価でない) な憩を求め出し、出石町へやって来るようになり、それに対応する就業形態に変わったことを示しているのであろう。

町役場の助役さんの言によると「運のいい町ですよ」ということになるのだが、地場産業の最後かせぎとなった「ガチャ万」が、オイルショックで崩壊していく過程で、それをうけとめたのが“出石皿そば”の店である。現在あるそば店のうちの10店舗近くがちりめんからの転業だとみられる。ついでにガチャ万について述べると、戦後の輸出産業の花形だった繊維産業の一翼をになった丹後・但馬ちりめんは、織機をガチャと動かすと万円儲かるという意味で、昭和30年代から40年代の始めまでメリヤスも含めて我が代の春謳歌していた。これらはいわゆる中

進国産業で、今では韓国・中国にとってかわられて、但馬ちりめんは立直れないでいる。なかでも問題は生糸の支持価格制度で、韓国などより高い国産の原材料系を使って高い人件費の中で苦しむという、絹織物産業の矛盾を一身にひきうけているのである。

この矛盾のひとつの解決手段となっているのが“出石皿そば”産業である。

〈サービス業が若者をひきとめる〉

産業のサービス化の結果、町の就業者の年齢構成に何が起ったかについて述べてみる。(図4)

現在 (平成3年) の町内就業者年齢構成は15~44才 (戦後生れ) が47.9%となっている (平成3年町調べ)。大体45才を境にして半々の構成とみてよい。ところがもともと町の基幹産業であった農業は10.2%で、約90%は45才以上となっている。そのうちの60才以上が65.8%であり、年齢構成からみても農業が町の産業 (経済生活を支えるもの) としての役割をはたしていないことを示している。

それにひきかえ商業とサービス業は45才以下の比率が53.8%、62.7%となっており、若い人たちの就業のうけ皿となっていることがわかる。

出石町の製造業は在来の地場産業に加えて、近代工業の導入努力が続けられた結果、電気、一般機械工業などが立地し、若い就業者 (45才以下) のうけ皿として最も大きく寄与している。しかし製造業だけでは、若者をひきとめることはむずかしいということも示している。

今でも工場誘致ばかりいう自治体があるが、製造業は1人当り現金付与額でも他産業より多い傾向をもっているし、その役割は大きい、1業種に特化した工業城下町がどこでも衰退傾向を示しているように、ソフト化・サービス化した現代では巾の広さが必要

図2：全国の就業状況

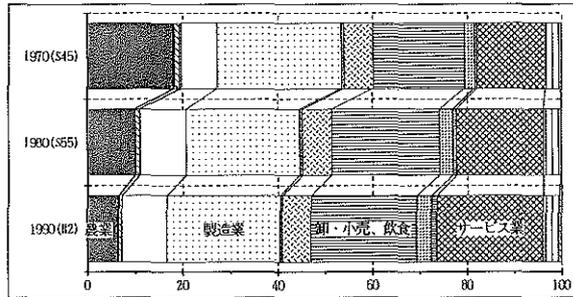
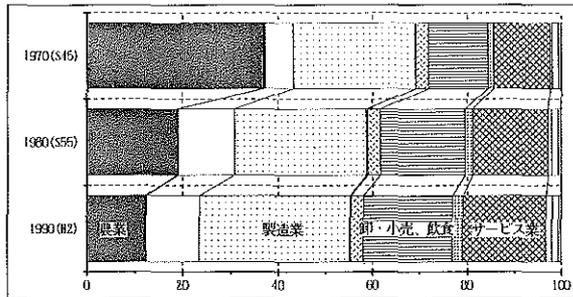


図3：出石町の就業状況



■ 農業 □ 建設業 ▨ 卸売・小売業、飲食店 □ 公務
 ■ 林業 □ 製造業 ▨ 金融・保険業 □ 分類不能の産業
 ▨ 漁業 ▨ 電気・ガス・熱供給・水道 ■ 不動産業
 ▨ 鉱業 ▨ 運輸・通信業 □ サービス業

になっているのである。

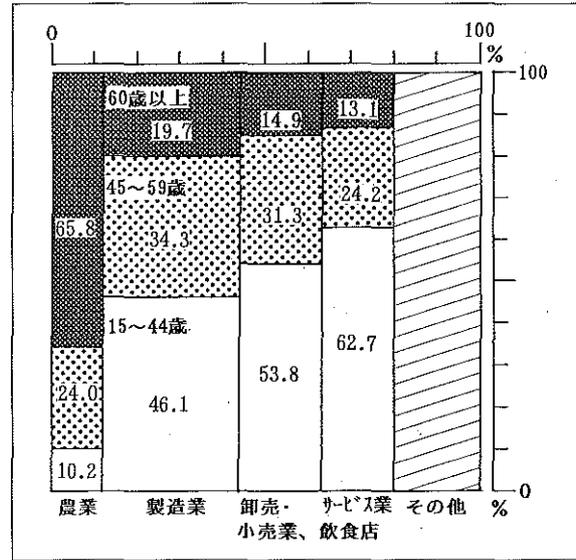
ついでに農業についてふれると、これも他の産業と補完関係にあるとき大きい役割をはたす。それが皿そばであっても製造業であっても、兼業することによって原材料の補給のみならず生活の豊かさをもたらす役割をになっている。

このような点から見ると、出石町は現在最もうまく歯車がまわっているように見える。

〈10倍になった観光客とそば屋〉

この20年ほどの間に、出石町で起った観光客数、飲

図4：主な産業の就業者の年齢構成



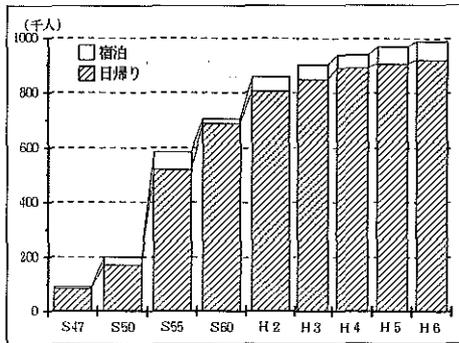
※「その他」の年齢別区分は行っていない

食店数、飲食店就業者数、そばの店舗数をまとめておきたい。(図5、表1)

観光客数の統計というものはこの統計でも、数え方があいまいで心もとない。出石町のカウントの仕方については①観光バスの駐車台数(大型そば店・ドライブインの駐車台数をカウントしているが、ここはそばを食べることを目的とした観光客なので、ダブルカウントはほとんどないとみられる)、②町の施設(家老屋敷、美術館など)の入場者、③イベントの参加者、で計上し、乗用車数は見ていない。②についてはダブルカウントもカウント落ちもあると考えられるが、全体として大体妥当な数値とみられる。観光客数は20年間に約10倍となっている。

また観光客というものは、ボトムとネックの落差が大きいことが一般的な特徴とされているが、この

図5：観光客入り込み数の推移



年	商店数 (店)	従業者数 (人)	年間販売額 (万円)
S45	26	57	6,027
S47	29	63	9,893
S49	33	87	12,873
S51	38	88	21,232
S54	56	105	42,138
S57	62	138	75,457
S61	61	168	90,058
H元	63	212	124,000
H4	77	268	201,418

表2：飲食店の推移

単位：千人

	計	春 (3~5月)	夏 (6~8月)	秋 (9~11月)	冬 (12~2月)
S55	584	155	110	201	118
S56	599	162	114	205	118
S57	645	173	123	220	129
S58	685	213	132	233	107
S59	696	201	127	234	134
S60	705	190	122	229	164
S61	786	186	113	326	161
S62	837	205	124	322	186
S63	820	221	162	246	191
H元	855	238	162	268	187
H2	857	274	157	251	175
H3	901	283	162	282	174
H4	938	272	224	277	165
(H4)	100.0%	29.0%	23.9%	29.5%	17.6%

表1：観光客入り込み数 (季節別)

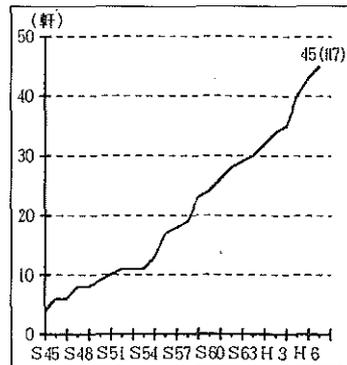


図6：そば店数の推移

※文章中にある各表の数値は「出石町統計書」による

出石町は1年中極めて均等に來ている。ピーク3ヶ月(9~11月)の集中度率は30%でボトム(12~2月)が18%であるので極めて都合がいい。これは夏は海水浴、冬はスキー帰りの人々が利用してくれるからで、他の観光地をうまく活用していることになっている。

飲食店はこの20年間ほどの間に51店、従業者数で200余人増えている。(表2)

そば店は、昭和45年頃は冬の兼業であった。本来そばという食べものは、そばの採れる晩秋から春先

までのものとされており、当時はその期間だけ開店されていた。年中食べさせるようになったのは45年頃以降である。したがって、店舗数の増加と比較にならないぐらいのそば店の繁盛があると考えねばならない。(図6)

そば店の売上は平成元年で、当地で食べていただく「皿そば」で15億円、「半生・乾そば」が12億円と町が推計している。おそらく現在では両者で40億円に達していると思われる。この他にそば以外の土産



街並み整備事業でつくった土産物、飲食店街

品もあるので、かなり大きい産業（他の業種より付加価値も高い）とみなしてよからう。

〈兼業観光の見事な出来映えを示す出石町の

今後は……〉

もともと日本の地方都市や町村は、300年間の封建領主の時代から、地域ごとの“こまごま・しこしこ努力型”の物産づくりが盛んであった。地方の伝統産業を調べてみると、物産開発のためのさながら産業スパイのような生命がけの努力がうかんできることが多い。この良き伝統は高度成長時代の大工場誘致主義による安易な方法で破壊されてしまった。そして大工場の城下町であることが、地域の誇りであるかのような錯覚が支配してきた。その錯覚の間に、ブルーとかカーキ色の制服一色の世界となり、街のもつ“いかがわしさ”や“かわい性”が失なわれた。

おそらく、今後の地域を支え、若い人たちの支持をうける地域づくりは、“こまごま・しこしこ努力型”のサービス業やサービス型のモノづくり産業であるにちがいない。

今まで見てきた出石町の観光は、伝統産業の出石



月曜日でも観光バスが並ぶ町の駐車場

焼の50%近くがそば店で販売されていることや、農業がそのまま生かせるということなどが示すように兼業観光の完成品のようだといってよい。

またプロセスを見ても、不況時になると来客が増しているとか、他でのディスカバー・ジャパンといったキャンペーンの努力の受け皿にうまくはまるとか、駅がないのに国鉄の周遊地指定をうける（昭和52年）などと、運も良かったと云えよう。

町役場も、これらの動きにうまく対応し、昭和60年以降には多様な事業に取組んできている。以下に主なものをあげてみる。

- ・ 景観ガイドラインづくり
- ・ 町並みゼミ
- ・ 都市景観助成事業
- ・ 町立美術館
- ・ 町家デザインマニュアル
- ・ 街並み環境整備事業

今後の問題について一言だけふれると、私は観光は3つのパターンがあると考えている。それは①アイデンティティ観光＝これはわが町も何か自慢できるものがほしいというもの、②兼業観光、③専業観光

の3パターンである。

では出石町は専門観光に進むべきなのか。私は兼業を一層ふかめることのほうがよいように思う。「日帰り型から宿泊型」へとよく云われる、この間には一大飛躍がある。つまり夜の時間帯をもたせる街づくりのためには膨大な投資が必要である。出石町では「そば屋は一軒も倒産していない」といわれているが、それは投下資本にふりまわされていないからである。観光業のポイントは固定投資をひかえることにつきる。それがシーズン・週日による稼働の片よりを受容するカギでもある。ということからいっても、出石町は今後モノづくり重視をし、それらとの連携をはかる方向が良いように思う。

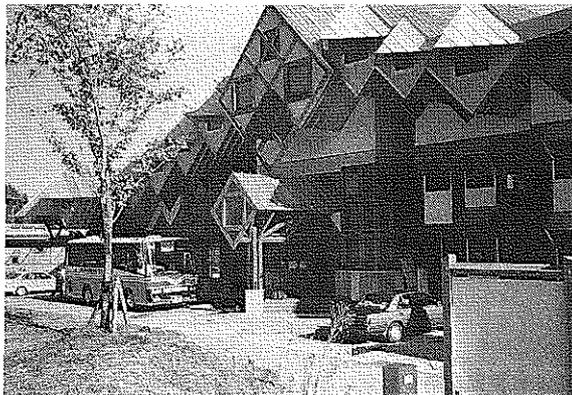
最後に一言。最近では“そばを生かしたまちづくり”という話が各地にある。しかしそばがあるからといって簡単に多くの人があるわけではない。出石町の場合は、先人の築いた落ちついた歴史的“たたずまい”と出石焼を生かした“皿そば”というワンコソバ風なゲーム性があるって人々の関心をひいたものである。「そばにも容器と薬味がいる」のである。

(糸乗貞喜)

建築から始まった小国のまちづくり

—地方シンクタンク協議会
第5回九州・沖縄ブロック交流会

今年で5回目となる、地方シンクタンク協議会の九州・沖縄ブロック交流会が10月24日(火)、25日(水)の両日、熊本県小国町で開かれた。「地域活性化と地方シンクタンク」と題し、まちおこしの先進事例といえる小国町の話を中心に、視察を交えて行われた。



ユニークな外観の“木魂館”

小国町は阿蘇外輪山の北側にあり、熊本・福岡・大分3県の県境に近い。杖立温泉などの観光資源もあったが、10年ほど前から特産の小国杉を使ったユニークな木造建築でまちおこしが始まっている。

小国町に入って物産館「びらみっと」に立ち寄った後、研修及び宿泊は小国町を代表する木造建築のひとつである研修施設「木魂館」で行われた。

小国町企画班長の松原崇氏から、これまでの小国のまちづくりの経緯や今後について話していただき、そのあと木魂館の設計者である熊本大学の桂英昭氏をコーディネーターとして意見交換が行われた。その一部を紹介する。

- ・旧国鉄宮原線の終着駅であった肥後小国駅が路線廃止によりなくなった。これをどうするかというのがまちづくりの始まりだった。
- ・駅跡地に小国杉を使った「ゆうステーション」が珍しい木造立体トラス構法で建てられた。その意外な木造建築に町民が刺激され、閉鎖的だった町民性が変わってきた。つまり木造建築が町民を変える第一歩になった。

- ・小国のまちづくりは、最初の5年間で建築パフォーマンスの時代、次がイベント交流の時代、今は住民活動の時代になったといわれている。
- ・最初は行政主導だったが、地域の人に土地利用について考えさせ、今では地域の経営や将来像を語れるようになってきている。地域の像は地域の人が決めるというのが本当の地方自治ではないか。
- ・町の中のそれぞれの地域がひとつの地方自治体のようなものになってきた。そこでこれまでの町の権限を地域に少しずつ与えている。
- ・地区ごとに活動していても、その中での一極集中が起こっている。また流入者がかたまっってひとつの新しい集落ができるなど、日本の抱えてる問題がこんなところにもある。
- ・地域活性化とは何かを客観的に捉えることは難しくなっている。人口や収入ではもう出てこない。
- ・小国の『地域哲学』の中にある「適正な有料を上げみとし……」という表現は、微妙な点をついている。
- ・活性化に人口は関係ないというが、豊かな生活ができるどころには人が住む。人口もひとつの指標になるだろう。
- ・まちづくりにも成熟過程があるようだ。中年グループに「おくれをとった」と思わせてる小国はかなり成熟に近いのではないか。

2日目は、地元の自然食品を中心とした朝食（大根おろしがめちゃくちゃ辛かった。あれが本来の大根の味か）の後、日本建築学会賞を取った「小国ドーム」、木の玉のようなドームを配した「西里小学校」、『道の駅』にもなっている「ゆうステーション」など小国の木造建築を中心に見てまわった。

なお私自身、熊本の大学の建築学科の出身で、桂

先生にも教えを頂いていながら、木魂館はおろか小国に行くのも今回が初めてという不届き学生であったことをやや反省している。（伊藤 聡）

土石流禍からの復活の息吹・雲仙深江町

雲仙普賢岳の東側の麓一帯は、1993年の4～5月に土石流に見舞われ、人々が切り開いてきた暮らしがすっかり土石に覆われてしまった。島原市と諫早市を結ぶ島原電鉄は、島原外港駅と深江駅の間が今なお復旧工事のため、不通となっている。

新聞やTVなどは、1990年に始まった普賢岳の噴火以降、火砕流、土石流と次々に襲いかかる災害を、無慈悲この上ないこの世の地獄だと報道していた。

さる10月下旬、被災地である深江町を偶然通る機会があり、被災後2年経って実際に見てみたが、そこには復活の息吹のようなものを感じた。

まず道路。昨年復旧した国道251号は舗装がまだ真新しい。これは堆積した土砂の上にそのままアスファルトを貼った道路である。撤去するには多すぎた土砂。災害で約1.5kmにわたって埋没した道路は、土石の上を再舗装してできた。

また、2階まで埋まった家々のすぐ隣に、新築した家や、営業を再開している美容院などがある。この場所にもう一度住もうとする、土地の人の強い意志が表れているようにみえた。さらに、何もかも埋まって見晴らしが良くなったことを観光資源化し、駐車場を作り、普賢岳にちなんだお土産を売っている人もいた。

土石流が発生した水無川と中尾川では、現在、国の直轄事業で砂防ダムと導流堤の建設、河川改修事



この家以外にも、ほとんど土石流にうまっている家が
沢山あった

業が進められている。

先日、鳥原地域の市町村が集まり、普賢岳の災害後の地域づくりの構想が検討されたと聞かすが、その際、被災地を保存し防災をテーマにしたテーマパークをつくるなど、自然災害を資源化した興味深い地域振興策が提案されたそうである。今後一連の災害禍から立ち直った時、どのように暮らしをたてることになるのか気がかりである。(尾崎正利)

特集 朝市・市場を歩く

柳橋—沖繩—津屋崎

このところ事務所では「朝市参り」や「市場めぐり」が流行りになっており、それではと本誌で『朝市・市場特集』を組んでみました。

〈福岡市・柳橋連合市場「70周年イベント」〉

去る11月3日に“博多の台所”柳橋連合市場で市場創業70周年のイベントが開催されると新聞で宣伝

されていた。極上の刺身とアラを使った鍋と、つきたてのモチが先着千名にサービスされる予定とのこと。早速行って来た。

(予想以上の長蛇の列、先着千名に入れるか?)

市場に行くと大変な人出で、人に流されてしまいそうなほど。どの「先着千名」にも先が見えないほど長蛇の列が出来ていた。福岡市の都心に近い市場であるため、一家総出で繰り出しているファミリー、若いカップル、高齢者のカップル、大学生風のグループなどいろんな人がいた。私も並んで先着千名に入れてもらい、刺身、アラ鍋、モチのサービスにあずかることができた。魚や惣菜が飛びように売れていた。各商店のおばちゃんやお兄ちゃんの威勢のいいこと。先着千名サービスは十分なPR効果があったようだ。

大正年間に13軒で廉売市場としてスタートした当市場は、現在加盟店舗が63店舗。毎年、歳末には東京のアメ横、大阪の天満橋市場などと並びTV中継で賑わいが映し出される。魚屋のお兄さんと話してみると、最近は普通の日ではかつてのにぎわいは見られなくなったが、外商(市場の料亭やホテルへの配送)が増えて、店頭小売りと合わせて成り立っているそうだ。同じようなことを長崎の築町市場、大黒市場(本誌では食場日誌で何度も登場した)で聞いたことがある。日曜日の昼下がりにはこれだけの人出があったのは久しぶりとのこと、都心の交通の便が良い所では人寄せPRと商店主の元気さ次第では、人を集めるのは可能なのだと感じた。

(休憩したり、食べたりできる空間があればもっと人が呼べる)

私は、柳橋連合市場に小売店舗を加えいろんなサービスを加えて、都心のプレイスポットにできないか



福岡市柳橋連合市場の入口

那覇・牧志の市場では買ったものを 調理してくれる 津屋崎の朝市で見つけたアナゴ

と思った。イベントの最中、市場を歩き回って気になったことが2つほどあった。一つはホッとする場所がほしいと思ったこと。今は店舗が連なる通り抜け専用の機能になっているが、袋小路のような場所であれば高齢者や子連れの家族が休憩できる。

もう一つは、新鮮な魚や肉を買って、市場の中で調理してくれるサービス機能があればと思ったこと。いきのいい鯛や鱈、鰻は大好きだけど、持ちかえって調理するのは面倒という人の購買意欲をかき立てるような、小売り+料理屋のサービスがあれば、都心の魅力あるスポットになると思う。特に空店舗の空間や建物の2階部分を有効に活用できないか、というのが私個人の意見である。

〈那覇市の市場「牧志第二公設市場」〉

最近、沖縄県那覇市の観光スポットとして那覇市の市場を取り上げることが多くなった。特に観光客が多く集まるのは「牧志第二公設市場」である。私も同市場に3年ぶりに行ってみることにした。

(主力商品は観光客向けの品になっていた)

牧志第二公設市場は、1階が魚介類を中心とした生鮮市場になっており、2階に食堂が5~6軒入っている。ここの特徴は、1階で気に入ったものを買って、

上に持っていけば有料で調理をしてくれる点である。

先に述べた福岡柳橋連合市場ではこれと同じようなシステムが欲しいと思う。このシステムの珍しさと市場のおばちゃんたちとのやりとりの楽しさが観光客にウケているようだ。

3年ぶりに行ってみると、伊勢海老やわたり蟹や鯖など、観光客向けのものが主力商品になっており、反対に地元の人の日常食べる魚や豚肉など安い商品が少なくなったのは少し残念な気がする。その日は1階で伊勢海老を購入し、2階で刺身と味噌汁を頂いたが、海老代と調理代で3,800円であった。食堂では料理を注文でき、ここで食べる定食は「量多め値段安め」の満足できるメニューがそろっている。今回別途注文した田芋（沖縄ではターンムという）のてんぷらは熱々のが5つで300円。味の方は海老よりこちらの方が良かった。

(巨大な市場全体のマネジメントが重要ではないか)

最近では観光客の人気もあって賑わいを維持している公設市場であるが、公設市場を含む那覇の巨大なアーケード街全体では果たしてどうか。このアーケード街を歩くのも一部の観光客の間では流行になっているといわれる。衣類や惣菜、履き物、乾物などい

ろんな種類の業種があるが、土産品はあまりみられないことから、地元の人をターゲットにした商売だとみられる。アーケード街の奥の方は路地が入り組んで迷路のようになっており、観光客が来ない奥の方では、人通りがほとんど無く、日中シャッターが閉まっているゾーンがかなりあった。賑わっている公設市場とは明と暗のような雰囲気にもえた。

表通りの観光客相手の店と奥の地元客相手の店がうまく融合することで、巨大な市場の発展につながると思われ、市場全体のマネジメントや運営が今後、重要になるのではないかと思った。(尾崎正利)

〈活魚を売る朝市—津屋崎町魚市場〉

朝6時からの売り出しである。私が到着した6時半頃には既に店頭らしきところに多くの人だかりがしていた。ここの市場のユニークなところは港のすぐそばで行なわれており、朝早く捕れた魚が漁船から直接店頭を下ろされ、商品となっていること。また、活魚が売られていることである。

港近くのこの市場の風景と潮の香りは、胃袋と財布のひもを緩めるには十分の効果がある。

私も早速、「活魚のバリ1匹(これはその場で直ぐに包丁を入れられたが、この世を惜しんで我が家に着いてからも成仏しきれずにいた。)」[ホウボウ8匹][カニ大皿一杯(確か20匹程度あったと思う。)]「甲イカ8匹」を買ってしまった。しめて値段は2千円なり。その後3日間はこの魚介類を食べる羽目になったことは言うまでもない。朝市にいて朝から刺身を肴にビールを飲むと、やはり「朝市参り」が病みつきになってしまうようである。

この魚市場は平成4年に漁協の有志によって始められ、初年度と2年目に広告費のための町から補助を受

宗像郡での朝市リスト

- 福岡ふれあい朝市：第3日曜日／6:30～8:30
鮮魚・海産物・野菜
- 神湊漁協広場：土・日祭日／7:00～17:00／鮮魚・海産物
- アクシス玄海朝市：第2・第4日曜日／6:30～10:30
野菜・果実・魚介類
- 宗像市赤間熊の越公園市場：毎週土曜日／8:00～12:00
野菜・果実・鮮魚
- 宗像市JA自由ヶ丘支所広場市：毎週金曜日／7:00～10:00
野菜・果実・海産物
- 宗像市須恵JA河東支所広場市：毎週水曜日／5:30～10:00
野菜・果実・鮮魚
- 宗像ユリックスむなかた朝市：毎週土曜日／6:00～8:30
野菜・果実・花・海産物
- 宗像市東郷JA東郷支所倉庫：毎週木曜日／8:30～10:00
野菜・果実・鮮魚
- 福岡木曜日：毎週木曜日／8:00～10:00／野菜・花・海産物
- 福岡町JA神興広場市：毎週水曜日／7:00～8:00
野菜・花・海産物
- 津屋崎町あんずの里市場：第1、第3日曜日／8:00～10:00
野菜・花・海産物
- 津屋崎町宮司獄神社駐車場市：毎週水・土曜日／10:00～11:00
野菜・鮮魚

けたそうであるが、現在では全く自力で行っているということである。現在15戸程度の人たちが毎月の第2、第4日曜日に開いている。但し1月と2月は定休月ということである。現在、年間10ヶ月間で概ね1万人程度の人 coming ののではないかということであった。

今では魚だけでなく、地元の農家の方が持ってこられる野菜や饅頭を売る店が何軒が出ており、相乗効果が発揮されはじめていることが窺われる。

今、このような朝市がブームで、津屋崎近辺でも上記のようなところで朝市が開かれており、私も朝市のはしごをしなくてはと思っているところである。

(山田龍雄)

私の近況

ミニミニデイサービスを見学

10月28日のWAC長寿社会まちづくり研究会では、WACアクティブクラブのみなさんと、北九州市八幡西区にある「あいの会」山の家を訪ね、ミニミニデイサービスを見学しました。

たすけあい・北九州「あいの会」は石井和枝さんを代表とし、有償のサービス活動を行っている団体で、サービスを提供する本会員（登録約130人）とサービスを受ける受給会員（登録約170人）、賛助会員とで構成されています。受給会員を訪問して、主にひとり暮らしのお年寄りや病気の人の簡単な介護、主婦にかわって留守番、家事援助、産前・産後の手伝い等のサービス提供を行っています。この日は土曜日ということで、普段と違って、受給会員の方が「山の家」に集いました。

「山の家」の玄関を開けて入っていくと、ワーカーの皆さんが、「いらっしゃい、あらまあ遠いところをようこそいらっしゃいました。」と迎えて下さいました。また、お年寄りの皆さんも得意の歌や踊りを披



お年寄りの皆さん、ヘルパーさんと一緒に

露、歓迎して下さいました。私たちがの方がお願いして実現した見学であったのに、こういうちょっとした心づかいが妙にうれしく感じられ、こんな風に、やさしさをもらったり、時には分けたり、お互いにあるような迷惑を掛けたりしながら、助け合って暮らしていくのだったらいいだろうな、と自分の何十年か先を思いやってみました。（伊藤加奈）

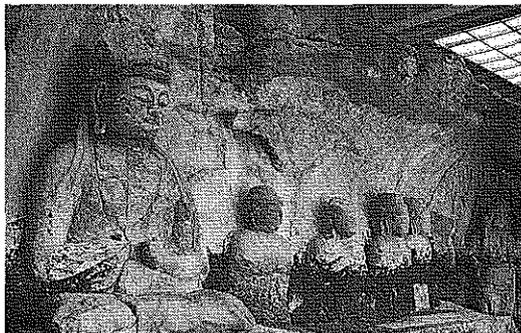
阪神大震災とインターネット

10月19日、地域ゼミとSAS九州の合同で、「阪神・淡路大震災でのインターネット等の活躍」として、アルバックインターナショナルの榎原淳さんに話していただきました。震災のときには、地元のテレビ局やFMラジオが密着型の放送を行って役に立ったこと、インターネットは1対1の安否確認ができたことと被害の悲惨さを全世界に伝えた効果があったこと、都市のバックアップ体制が重要であることなど様々な内容でした。インターネットについての話は、詳しいことは省略しますが、本来役に立つものを、日本ではダイヤルQ2の様に風俗に使われてしまうのが怖いそうです。

余談ですが、インターネットがつながると、男性はすぐアメリカのプレイボーイのホームページを開きたがるけど、多すぎてなかなかアクセスできないそうです。（伊藤 聡）

白杵石仏めぐり

表紙の阿吽像は鼻が欠けているので「鼻はないのに、におうぞう（仁王像）」と云われているそうである。この白杵で最も有名な石仏（次頁写真）は、首が胴体にすえられていた。ここの磨崖仏は軟質の凝灰岩でできており、地震で首が地上に落ちたといわれている。首がすえられたので、下にある時より少し小さく見えた。いずれにしてもこの磨崖仏群はす



首がもどった石仏

ごい迫力である。各磨崖仏は苔などの汚れを落としてきれいになっていたのも、一層あざやかに見えた。

(糸乘貞喜)

関鯖を食べた！

全所員あこがれの関鯖を、ぜひ捕れるところで食べたいと、豊後水道に面した大分県佐賀関町に行ってきた。

事前に旅館の人と話したところ、「最近では鯖の水揚げが少ないので、あまり期待しないほうがいいですよ。」とのことだった。しかし、思いが通じたのか、風呂から上がると、テーブルの上には、ピンと弓なりに反った関鯖が1匹（若干形は小さめ）、関鯔も2匹（なかなか大きい）乗った船盛りが2つ鎮座ましましていた。新鮮なのは当然のこと、しこしことした歯ごたえ、なんとも分かりやすいおいしさで、「やっぱり関鯖は違う」「来た甲斐があった」と唸りながら計6匹の魚達はまたたく間に、頭と骨だけとなってしまった。

他に、なまこ、穴子のてんぷら、メバルの煮物、あらかぶの味噌汁等々を大分の地酒「西の関」を飲みながらいただく至福の一時、やはりここは豊の国であった。

一同満足しきりであったが、唯一、刺身の後のあらが食べられなかったのが心残りであった。

(金川 薫)

“韓日古典音楽のふれあい” という音楽と踊りのタベにいった

何でも文句を言いたがる野郎だから、何か文句を言うんだらうと期待されていると思うのだが、一応、素直に感想を書きたい。韓国の民族舞踊「僧舞」「サルプリ」、嶺南農楽「サムルノリ」は素晴らしかった。他にも幾つかあったのだが、この三つが印象に残っている。前二者は、この夏韓国で見せていただいたので、馴染みもあって楽しかったが、サムルノリは初めてだった。これは正に農楽で、わきたつような雰囲気太鼓や鉦、小金等によって醸し出されていて、これをやれば田植えも稲刈りもすぐに終わりそうな気分だった。熱演ぶりもすごかったのである。

この催しは、日本の雅楽と韓国の国楽の競演だったが、雅楽と韓国の国楽はまったく違うと言うことも分かった。私の感じたことは、雅楽は舞も楽もそれ自体が主体として演奏されるのではなく、状況の伴奏とされるものだなと思った。それに対し、国楽は舞も楽もそれ自体が唸って自己主張をしているということである。

やっぱり一言、ふたこと文句を言いたい。ひとつは、サムルノリの演者がノリにのって熱演しているのに、「きっちり終わらないと手を叩いてはいけいなのだぞ」という態度はどうかと思う。途中だろうとなんだろうと、農楽の太鼓なんだから気分がのって来たなら手をたたきたい。手の音が聞こえたのは、私の近辺だけだったようにおもう。行儀がよすぎるのはさみしい。ついでにもうひとつ、「韓日古典……」という標題が気に入らない。確かにウエイトは韓国

の国楽にあったが、やっぱり、日本での行事は「日韓……」とすべきではないのか。状況の空気に迎合するような、変な気の使い方は、結局、日韓の素直な交流を妨げるように思う。(糸乗貞喜)

地方からの発信「吉野ヶ里ボックス」

前号で紹介されたビタミンC健康法の本は、佐賀春秋社発行の「吉野ヶ里ボックス」によるものです。本の中にも書いてありますが、「地方からの発信」をしたいという編集者の思いから始められたのがこのボックスです。この思いに共感して村田先生（佐賀大）も監修を引き受けたと御本人からうかがいました。この話とビタミンCの話を生から聞いて、私も愛用することにしました。余談ですが、先生の部屋には世界中のビール缶が所狭しと並べてあり、先生の専門の発酵のためだそうですが、適度なアルコールとビタミンCの相乗効果を身をもって実験されているのだと感心した次第です。(山辺真一)

贈りものは道楽である

大道芸をテレビで見ている、「この人たちは、なんでこんなことをやっているのかな」と考えた。結局のところ、「自分にとって一番面白い、楽しいことは多くの人々を、喜ばすことなんだな」と思った。大道芸人たちは、路上に立って、通りがかりの人に果たし状をつきつけて相手を喜ばす戦いをいどみ、自分も満足するという道楽をしていることになる。本来仕事というものはこんなことかもしれない。しかし、私が以下に書くのは仕事レベルには達しない贈りもののことである。

この夏、自分で気に入っている焼酎“百年の孤独”を買う方法が分かったので、10本余り手に入れて贈りものにした。勿体ぶって言うようで申し訳ないが、これは本当に手に入りにくい代物で、夏頃でも、注

文から入手まで2カ月ぐらいかかり、冬の今では3カ月ぐらいかかる。

この焼酎の反響が面白かった。曰く「名前が気障なので警戒したが、味はよかった、よかった」。曰く「実は聞いたことがあって、何とか飲みたいと思っていた。ありがと、ありがと」。「前に宮崎の人にもらって一度飲んだことがあって、この味しっているんです、おおきに」。曰く「亭主が今飲めないことになっているので、私が亭主のいない昼の間に飲んでしまいます。しめしめ」と言った調子です。

私は、自分の道楽を十分楽しませていただきました。(糸乗貞喜)

本の紹介



「西南日本の 経済地域」

経済地理学会
西南支部 編
ミネルヴァ書房

本書は経済地理学会西南支部設立5周年の記念出版物である。本書における西南日本とは、中国、四国、九州の各地方を包括する地域を指している。本書で取り上げられているテーマを大きくみると、都市地域、工業地域、農山村地域の3つの地域における現状

と課題と将来展望、それに今後の西南日本の地域政策についての総合的な方向性の提言である。

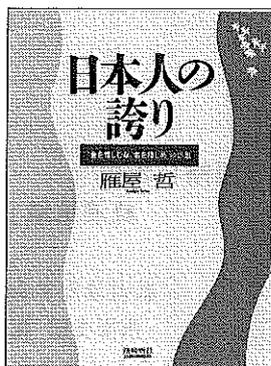
地域政策の章の最終節では、本書を弊社に謹呈いただいた松原宏 西南学院大学経済学部教授が執筆されており、離島・半島地域、過疎地域が多い九州において、将来的に予想される人口動態や高齢化を踏まえた、新たな地域活性化戦略の方策が挙げられており、一つは九州内における域内循環や産業連関の強化とされており、もう一つはアジアの都市との連携の強化とされている。

特にアジアとの近接性を生かした地域振興につい

ては、都市間ベース、企業間ベースの交流が現在求められていることから、産学官の共同プロジェクトによる環シナ海都市システムの構築による域外交易が重要であるとの提言がなされている。

この一冊で西南日本地域の経済構造、社会構造、産業政策の変遷、国の地域政策と地域の関わりなどが、おおよそ把握できるものと思われる。

特に西南日本地域以外の人に対しては、南西日本地域の姿と今後の方向性を把握するのに非常に適している本であるだろう。(尾崎正利)



「日本人の誇り」

—「金を惜しむな名を
惜しめ」の思想—

雁屋 哲 著
飛鳥新社

劇画「美味しんぼ」の原作者である本著の作者は、1988年にシドニーに移住してから、太平洋戦争で日本軍がシドニーを砲撃し、オーストラリアの捕虜を虐待した事実を知った。その後マレーシア、シンガポールを訪れ、40人の聞き取りを行い、当時の日本軍の虐待と侵略行為の事実をここにまとめている。

私が学んだ日本史は受験用で、昭和以降については、大学入試に出題されないこともあって教えられていない。教えられたとしても日本の侵略行為にの事実を知らされたかどうかはわからないが……。

この本を読み進むにつれ、悲しさと怒りとが交錯するいい知れない複雑な気持ちにさせられた。その事実のみの語りは、日本軍によって虐待を受け、肉親や知人を失った人々の心の奥底に残っている怒りと悲しさを切々と伝えている。「身内33人を一度に殺された。」「赤ん坊を宙に投げ、突き刺した。」「オーストリアからシンガポールに派遣された従軍看護婦23人が海の方へ歩かされ、背後から撃ち殺された。」など数限りない事実が記述されている。著者はインタビューする中で、泣きながら語る人々から「つらくても目をそらさずにしっかり見届けることしかない」と語っている。

さらに著者は「戦争行為というものは国の国との正当な行為であって対等であり、罪の意識は一切抱いていなかった。しかし、なぜ日本人は目の前で非戦闘員である民間人（子供や娘など）を鉄剣で殺したり、捕虜に対して満足な食事を与えず強制労働を強いるようなことをしたのか。」「日本は子供たちに“つけ”を回すべきではない。金を惜しまずきちんと補償して戦後処理をすべきである。湾岸戦争の時、日

本は約1兆9千億円の金をアメリカに取られている。アジアにおける信用を取り戻せるなら3兆でも4兆でも安いものではないか。父や祖父がやり残していることは日本人の誇りを取り戻すことである。」と訴えている。

この本は、多くの人に読んでもらいたい、いや読むべき本ではないかと思った。(山田龍雄)



「イギリス人をこの地上から消してしまったら世界中がどんなにすっきりするだろう」と考えた本

「アーロン収容所」

会田雄次 著
中公文庫

この前に「日本人の誇り」という本について書かれている。私はこの本をたくさんの人に薦めてもらった。そのひとりの山田さんが書評を書いてくれた。「日本人の誇り」には、日本軍がオーストラリア人やイギリス、その他のアジアの人々にどんな非道なことをしたかについて、多くふれられている。読んでいてやりきれない思いがした。

しかしこの「アーロン収容所」は、イギリス軍やオーストラリア人の非道さについて書かれていて、読み進むたびにやりきれない思いがする。

この本は昭和37年に書かれたもので、30年以上前のものである。書かれている内容は、昭和18年夏召集をうけ冬にはビルマに送られ、ビルマ東部の英

軍大空挺部隊との戦闘は惨憺たるもので、兵力は数十万の一に減少し、全滅を待つばかりの時終戦になり、それ以後万年初年兵で一年十ヶ月の捕虜生活を送ったことである。

この本は世界各国の人間あるいは民族の違いについての優れた文明論となっている。冒頭の見出しは、英軍は常に沈着冷静で合理的で、非難に対しては常に言い抜けできるようになっており、日本軍のように逆上して残虐行為をしたりしないが、視点を変えればこれこそが「人間が人間になしうる最も残忍な行為」をしていたということに対して感じた言葉である。例えば、イラワジ河の中洲に収容されていた鉄道部隊（戦犯の疑をうけて）が、食糧が少ないので毛ガニを取って食べたためにアメーバ赤痢にかかって全滅してしまった。英軍はカニの生食はいけないと命令を出していたのに「日本軍は衛生観念が乏しく、英軍の警告をきかずに生食してアメーバ赤痢にかかって全滅した」と上司に報告したという話である。潮が満ちてくると全部水没するするような中洲の焚き木などのないところに収容し、うまい毛ガニを生食せざるをえない状況においこみ、「疫病にかかって全滅した」とする冷静・沈着な「残虐行為」に対して「地上から消してしまったら」と思うのである。

太陽に対するインド人の民話も面白い。「インド人の心はまず自然を憎むこと、それからの脱却を出发点として成長する。日本人の心は自然崇拝と自然への帰依に終始する。ヨーロッパ人は自然と友人となり、ときには支配しようとする方向に発展する」という見方のように、インドでは太陽は憎まずにはいられない、炎熱と破壊と飢えをもたらすものと見られているということである。

私は、もちろん著者の会田雄次も、反英活動を考えているわけではない。人間というものは、気候、風土、産業、歴史によっていかに違いがあるかということであり、冷静沈着でなく、ホットな心と冷静な態度で今後各国、民族とつきあっていかねばならないということである。イギリスから学ぶことにも多くふれている。戦争に負けて収容されているとき、「戦争を起こしたことは申し訳ないことであった」とあやまった日本人将校に対し「負けたら勝者のご機嫌をとるような人間は奴隷であってサムライではない。私の戦友も戦死したが、奴隷と戦って死んだと思いたくない。サムライと戦ったと思っている。そういう情けないこと言ってくれるな」と英軍将校が言ったという話もある。

この本は戦後の「日本人論」の嚆矢となった本である。私も「日本人の誇り」を読んだので再度読む気になって読みかえしてみた。以前より一層感銘をうけた。ぜひ、戦争を知らない世代の人に読んでいただきたい。
(糸乗貞喜)

編集後記

■あけましておめでとうございます。1年間多くの方々のお世話になりながら働き、また新しい年を迎えました。私たちの去年のスローガンは「それぞれの所員が、思い思いの特徴を生かして、お客様に一層のサービスを提供する“屋台村”づくり」でした。今後一層、役に立つ知的サービスができる事務所をめざして努力しようと思っています。

■世の中は一層きびしさを増しています。単なる作業だけで、効果を考えない計画、提案のない仕

事はいらぬという時代になっていると思います。皆様方から苦情や知恵のお助けをいただけたらと思っています。

■「よかネット」の内容についても同じような観点が必要かと思っています。叱咤のほどよろしく願います。

編集員兼所員一同

糸乗貞喜・山田龍雄・山辺真一
歌丸星子・富重慶子・伊藤 聡
尾崎正利・金川 薫・伊藤加奈

よかネット NO.19 1996.1

(編集・発行)

㈱九州地域計画研究所

〒810 福岡市中央区天神1-15-1 日之出ビル6F
TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

(ネットワーク会社)

㈱地域計画建築研究所

本社 京都事務所	TEL 075-221-5132
大阪事務所	TEL 06-942-5732
名古屋事務所	TEL 052-962-1224
東京事務所	TEL 03-3226-9130